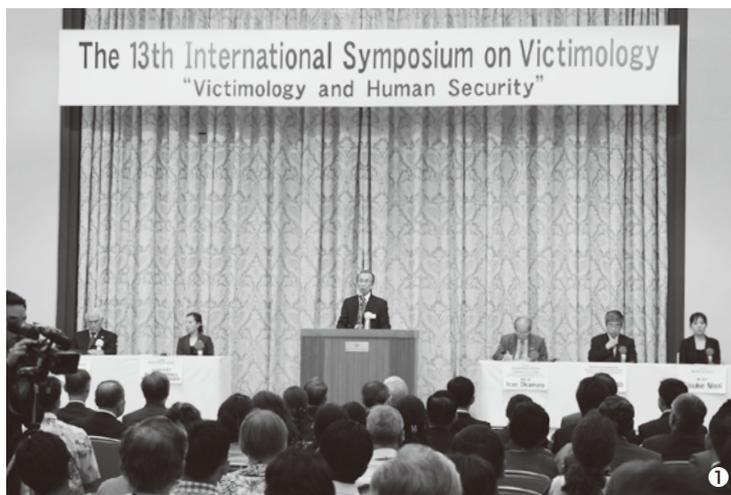


未来が求める、その先の学び舎へ！

◎学校法人常磐大学開学100周年記念事業

次の100年に、新たな一歩を踏み出す

国際被害者学シンポジウム・教育実践研究所・
記念式典・記念ホームカミングデー

- ① 国際被害者学シンポジウム開会式。
- ② 教育実践研究所開所式後に行われたフィンランドの教育に関する講演会。
- ③ 数多くの関係者らが出席して盛大に執り行われた記念式典。
- ④ 高校から大学までの卒業生が対象となった記念ホームカミングデー。

学校法人常磐大学は、2009年で開学100周年を迎えた。これに伴い、現在、さまざまな開学100周年記念事業が執り行われている。昨年8月には『第13回国際被害者学シンポジウム(世界被害者学会主催)』を、共催者である常磐大学をメイン会場として開催。47の国と地域から被害者学研究者や実務家ら約500名が、最新の研究発表や世界各地の現状報告を活発に行った。また、9月には『教育実践研究所』が開所。学校法人常磐大学が設置する各学校の教育力を高め、教材の開発や授業方法の改善などに対する取り組みを開始した(関連記事4面)。続いて、11月22日には水戸プラザホテルにおいて『記念式典』を開催。来賓の方々や関係者、さらに卒業生や在学生など約450名にご出席いただいた(関連記事2面)。また、記念式典と同日に行われたのが『記念ホームカミングデー』。「時を超え、世代を超えて、つなごう、常磐の輪(ときわ)」をテーマに、373名の卒業生や教職員らが一堂に会した(関連記事3面)。こうした一連の開学100周年記念事業は2013年度まで行われ、これからも、さまざまな事業が計画されている。

*Tokiwa Memories*7*

常磐大学開学当時の校舎
(F棟・G棟・H棟)
(1983(昭和58)年)*解説=14p

■ 100周年記念事業・I

次の100年への足跡を刻む『記念式典』を開催

● さまざまな分野の関係者や卒業生・在学生ら約450名が参列



11月22日、水戸プラザホテルにおいて記念式典が開催された。会場には文部科学省高等教育局私学部参事官付学校法人経営指導室長の馬場剛氏、全私学連合代表者会議委員で社団法人日本私立大学連盟副会長の納谷廣美氏、茨城県副知事の川俣勝慶氏、水戸市副市長の橋本耐氏、学校法人常磐大学連合同窓会長の中崎啓子氏をはじめとする来賓の方々や学校法人常磐大学関係者、卒業生や在学生など約450名が参列し、盛大に開学100周年を祝った。

学校法人常磐大学を代表して式辞を述べた諸澤英道理事長は、「いま100年を振り返り、あらためて多くの方のご支援により学校法人常磐大学の100年があったのだと実感しています。これからの100年に向けて教育は社会貢献であるという原点を大切に、あるべき教育を求めて行きたいと思います」と新たな100年に向けた決意を表明した。その後、来賓の方々から温かい祝辞をいただき、式典は盛大に執り行われた。

会場では式典に引き続き、クラシック音楽の『記念演奏会』が行われた。出演者はソプラノの足立さつき氏、ヴァイオリン



演奏会では優美なアンサンブルが披露された。

◀ 式辞を述べる諸澤英道理事長/100年の歩みを振り返ると同時に、学校法人常磐大学の教育への取り組みを参列者に紹介した。

の小林美恵氏、チェロの長谷川陽子氏、ピアノの仲道祐子氏。全員が世界的に活躍する演奏家の方々だ。この演奏会では全7曲を演奏。美しい旋律で有名なスカラッティ作曲のオペラ“すみれ”や、サラサーテ作曲の技巧的なヴァイオリン曲“チゴイネルワイゼン”、そして全員で演奏していただいたレハール作曲の“メリー・ウイドウ・ワ



ルツ”などの名曲が、厳かな式典に華を添えた。

その後、会場を移動して開催された記念祝賀会では、まず高木勇夫学長が挨拶。続いて来賓の方々を代表して、

学校法人常磐大学顧問で学校法人南山大学理事長のハンス ユーゲン・マルクス氏から祝辞をいただいた。祝辞の後は学校法人常磐大学理事で中央大学名誉教授の渥美東洋氏の乾杯でパーティーがスタートした。歓談中は、出席者がこれまでの歩みや今後の展望について語り合う姿を場内各所で見る事ができた。

また、アトラクションとして水戸太鼓保存会による演奏が披露された。水戸太鼓の歴史は水戸藩の9代藩主徳川斉昭公の時代にさかのぼり、戦の演習時に先陣の合図として打ち鳴らされた陣太鼓を源流とする。勇壮な演奏は、新しい歩みを始める学校法人常磐大学の門出に、まさにふさわしいものとなった。

教育関係のみならず、さまざまな分野で大きな功績を積まれた方々が多数参加して行われた記念式典は、100年という歴史の重さを感じると同時に、これからの100年に向けての思いを新たにす式典となった。



祝賀会のアトラクションとして披露された勇壮な水戸太鼓。

■ 100周年記念事業・II

卒業生を対象に『記念ホームカミングデー』開催

●「時を超え、世代を超えて、つなごう 常磐の輪(ときわ)」

卒業生と教職員が一堂に会し旧交を温め合う『ホームカミングデー』が、11月22日に行われた。今回は開学100周年を記念して、学校法人常磐大学が設置する学校(幼稚園を除く)の卒業生を対象として開催。高等学校卒業生60名、短期大学卒業生138名、大学卒業生110名、大学院修了生3名、同僚の方9名、教職員53名の計373名が集まり開学100周年を祝った。

オープニングを飾ったのは、高等学校卒業生有志の会のメンバーで結成された『ブーケ・ド・ソン』によるミニコンサート。永田裕美子さん・小沼美知さん・石橋衣里さんのピアノ、砂押亜季子さんのソプラノ、桑名奈津子さんのフルートで、クラシック音楽の名曲が演奏された。

続いて、短期大学元教授で常任理事の竹中治利氏と現講師の鎌形由貴乃氏が、オペラを披露。会場に集まった参加者たちは、美しい演奏と歌声に聴き入り、感動のひとときを味わった。

懇親会では、まず諸澤英道理事長の挨拶があり、「今後、さらに世界や人類のことを考えられる人間を育てていきたい」と、これからの100年に向けた思いを語った。続いて、連合同窓会会長であり、短期大学の同窓会会長も務める中崎啓子氏が「これからも先生方、在校生の皆さんが精進され、学校法人常磐大学の伝統と歴史に新しいページを記していただけるよう、私たち卒業生も全力で支えていきたい」と、挨拶した。そして、高等学校の同窓会会長である小林三千代氏から乾杯の発声をいただき、自由歓談がスタート。参加者は同級生や教員たちと思い出話を花を咲かせながら、懐かしい映像や写真を見て親交を深め、再会を喜び合った。

また、自由歓談の途中で常磐大学・常磐短期大学OB・OG会の『TOKIWAおんぶの会』による演奏会も実施。各学校の



▲美しい演奏と歌声を披露した『ブーケ・ド・ソン』の皆さん。
◀楽しい演奏で会場を盛り上げた『TOKIWAおんぶの会』。



校歌斉唱も行われた。そして最後を締め括ったのは、常磐大学同窓会会長の池田正則氏。池田会長の発声で全員で三本締めを行い、盛会のうちにホームカミングデーは幕を降ろした。

短期大学を1972年に卒業した赤塚明子さんは「100周年というのは、本当に素晴らしいこと。その中に私たちがいたんだと実感しました」と歴史の重さを噛み締め、赤塚さんと同期の黒沢明実さんは「創立者である諸澤みよ先生のお話を直接聞けたのは、ありがたいことだと思います。先生の教えを守りながら、これからも過ごして行きたいです」と、みよ先生との思い出を振り返った。また、1988年に高等学校を卒業した川村幸子さんは「不安定な時代ですが、学校の信念を曲げず、確かな教育を続けてください」と語り、1993年に大学を卒業した轟啓介さんは「久しぶりにキャンパスに足を運び、規模の大きさにあらためて驚きました。これからも常磐大学が大きく成長し、全国に名前が通った大学になることを願っています」と、常磐大学の発展に期待を寄せていた。



卒業生を対象とした『記念ホームカミングデー』は、373名が参加し盛大に行われた。

■ 100周年記念事業・III

教育実践研究所開所式挙行・講演会開催

●教育力の向上と、効果的な教授法を追究する

9月26日に教育実践研究所の開所式が挙行された。研究所では、教育機関で日々行われている授業のあり方を体系的に捉え、より効果的な教授法を追究する。常磐大学の情報メディアセンター5階に開設した研究所の開所式には、水戸市の教育長を始め、近隣の小中学校の先生方にもお集まりいただいた。

諸澤英道理事長は、「学ぶことの楽しさを教育の現場で実現できるように考えなくてははいけない。これからの時代に必要な教育を法人全体で行っていく」と挨拶した。続いて、諸澤篤子研究所所長は「教員が変わらなくては、授業が変わらなくては、学校は変わらない」と話し、教育実践研究所は「リサーチを中心とした研究所ではなく、教員が自立的に学ぶ場」と語った。

開所式に引き続き、講演会が情報メディアセンターセンターホールで開催された。まず初めに、常磐大学国際被害者学研究所次長・大学院被害者学研究科教授のK. Chockalingam先生から「“偉大な教師 (great teacher)”の育成について」と題し



開所式で挨拶する諸澤篤子研究所所長。

て講演をいただいた。講演の中で、「“偉大な教師”とは、先天的なものではなく、後天的なものであり、日々の勉強や練習を繰り返し、経験を積むことによって技術や知識を身につけていく」と話した。

続いて、フィンランド・セポコール小学校校長のSaija Holopainen先生をお招きし、「フィンランドにおける初等・中等教育の現状と課題」と題し講演をい

いただいた。講演では、フィンランドの教育制度について概観し、9年間の義務教育期間で基礎学力を身につけることや義務教育に係る費用は全面的に無料であることなどが紹介された。特徴的な制度としては、基礎学力が身につけていないと思われる子どもが勉強する仕組みとして、9年間に1年プラスして履修することができる期間があることなどがあげられた。

フィンランドはPISA*の学習到達度調査で、世界トップレベルの結果を出しており、その教育のあり方については、世界から注目が集まっているところである。フィンランドの教育制度は、さまざまな時代を経て計画的に開発され、その結果が表れてきたとも言える。しかし、教育資金の確保や新しい指導方法の開発・導入の支援などの課題も指摘された。



講演するSaija Holopainen先生。

*PISAとは…15歳児を対象とした経済協力開発機構 (OECD) による国際的な生徒の学習到達度調査のこと。読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーを主要3分野として、2000年から3年毎に実施されている。



講演するK. Chockalingam先生。

●教育実践研究所 第1回講演会開催

11月4日、教育実践研究所の第1回講演会がR棟002教室で開催された。講師としてお招きしたのは、英字新聞ジャパンタイムズの編集局報道部長・COP15取材担当者であるEric Johnston氏。「新地球温暖化・気候変動防止条約：コペンハーゲンへの道」と題し、最新のデータを用いて100名を超える学生や教職員に対し講演をいただいた。

Johnston氏は「日本は、ソーラー発電や電気自動車など特に技術面でのリーダーシップが期待されるとともに、『もったいない』の概念は、地球温暖化問題の解決の一助になるのではないかと語った。参加した学生からは、「小さなことでも、地球の環境に対して何ができるのか自分自身で考え、行動していきたい」との感想があった。

TOKIWA INTERVIEW ⑬

開学100周年記念講演会より

世界の構造転換と日本
—そして大学の進路

寺島 実郎 氏 (財団法人 日本総合研究所 会長)

世界的な金融危機や頻発するテロなど、いま世界は出口の見えないトンネルに入り込んでしまった。この現状を打開するためには一体何が必要か、現在、(財)日本総合研究所会長を務め国際情勢にも詳しい寺島実郎先生にお話を伺った。

「今という時代を正確に捉えるためには、冷戦後の20年間をしっかりと総括する必要があります。それまでの日本は、55年体制のもと、資本主義と社会主義がしのぎを削っていた。しかし、ベルリンの壁が崩れソ連が崩壊したことで、資本主義が勝った、西が東に勝ったんだという安易な世界観が日本人の心に浸透していったんです。そして、アメリカの一極支配、ドルの一極支配の時代が来ました。ところが、その流れの中で、アメリカ流資本主義、金融資本主義の奢りと歪みが増え、プッシュ政権がスタートしたのもその頃です。そして、9.11が発生。これをきっかけにアメリカは『イラク戦争』という非対称戦争に突入して行きました。その結果、3兆ドルもの軍費を掛けて、5,000人を超す若者を死なせてしまった。そして最終的には『この戦争は間違った情報に基づく戦争でした』とプッシュ大統領は辞めて行くことになります。つまり、アメリカがイラク戦争で失ったものは、世界のリーダーとして最も重要な『正当性』だったのです」

アメリカの衰退を招いたもう一つのキーワードは『サブプライムローン問題』だ。

「アメリカは、公的資金を8兆ドル注ぎ込んでも金融セクターを安定化せざるを得ないところまで追い込まれています。イラク戦争の3兆ドルと合わせて11兆ドル。つまり日本のGDPの2年分に相当する額が国家財政にのしかかり、財政赤字は莫大なものになると予測されます。それを埋めるためには赤字国債を発行し、他の国に買ってもらうなければなりません」

現在、米国債を最も多く保有しているのは中国。必然的にアメリカは中国への出資を世界に呼びかけるなど、中国に配慮する姿勢をとらなければならなくなる。

「日本も、日米で連携して台頭する中国の脅威を封じ込めようなどとは考えず、中国を取り込んで行く考え方を持たなければなりません。アメリカは日米中のバランスの中で東アジアを制御して行こうと考えていることは間違いありません」

そして日本が目を向けなければならないのが『グレーター・チャイナ』と呼ばれる大中華圏だ。

「中国を本土単位で考えず、華僑国家と言われるシンガポール、人口の多くが中国系の香港、そして台湾を一括りとして捉えるグレーター・チャイナという経済圏があります。もちろん政治的体制は中国とは異なりますが、産業的に連携を深めて連結のゾーンを形成しているのです。冷戦が終わり日本の対米貿易が半分になり、中国との比重がかなり高くなった。そして、人の流れもアメリカから中国に変わり、日本人出国者も訪日外国人もその数において中国がアメリカを上回っています。こうした状況を見ていると、ヒト、モノ、カネあらゆる相関において日本はアメリカとの関係を大事にしながらもアジア、ユーラシアに重層的な関係を構築しなければならない局面が来ている、ということをご否定することはできません」

少子高齢化が加速する現代社会において、大学のあり方も構造転換が迫られている。

「日本と他の先進国との大学を比較すると、日本は留学生比率が非常に少ない。経済協力開発機構(OECD)の平均が7.3%ですが、日本の大学は2.6%に止まっています。また、社会人学生比率が極端に低い。25歳以上の学生がOECD平均20.6%のところ、日本は2.7%。これから少子高齢化が進む中、社会人教育にも視野を向けていくことが大切だと思います」

既成概念を反転させるほどの感覚で世界と向き合うことが、我々に求められている。(張替弘文)

PROFILE



てらしま・じつろう●1947年生まれ。1973年早稲田大学大学院政治学専攻修士課程修了、同年、三井物産(株)に入社。その後、米国三井物産ワシントン事務所長、三井物産業務部総合情報室長、(株)三井物産戦略研究所所長など数々の役職を歴任し、現在は(財)日本総合研究所会長、(株)三井物産戦略研究所会長、多摩大学学長を務める。



総合人間科学学会設立

『第1回総合人間科学学会(仮称)』開催

7月30日、『第1回総合人間科学学会(仮称)』が常磐大学H棟大講義室で開催された。この学会は2008年9月に発足した学内学会。常磐大学大学院、常磐大学および常磐短期大学に所属する研究者が学内で実践している研究活動を学内で周知して意見交換の場を広げ、生産的な研究活動を学内で促進させることを目的としている。名称から人間科学に限定される印象を持たれる



学会には、教職員を始め数多くの学生が参加した。

恐れがあるため、現在は仮称での活動だ。具体的な事業内容は、学内外の研究者による講演会の開催、研究の交流を目的とした研究者による研究発表会の開催、学生の学力向上や地域のニーズに応えるための研究会、またはワークショップの開催など。教職員はもちろん、学生、さらに地域の方々も取り込んだ活動を考えている。

当日は、まず発起人の森山哲美副学長が人間科学学会につ

いて説明を行い、「この学会を形式的なものではなく、意見交換がざっくばらんにできるような場にしたい」と抱負を語った。次に諸澤英道理事長が「研究者が自分の学問領域を超えて隣接領域まで入り、自分の研究を完成させていく場として活発に活動して行くことを期待します」と挨拶。続いて高木勇夫学長が「この場を、学内はもちろん学外の方々も組み込んだ活力のある

舞台として発展する場に作り上げていただきたい」と期待感を表した。その後、人間科学部の長谷川幸一教授が『総合人間科学学会のミッションに関する私見』というテーマで特別講演を行い、引き続き、11の学内研究会が紹介された。

今後、総合人間科学学会は学内学会委員会を設立して活動方針を明確化し、各種研究に関わる情報を学内の教職員や学生に提供して行く計画だ。

全国大学IT活用教育方法研究発表会

webによる教育改善の研究で『奨励賞』受賞

社団法人私立大学情報教育協会が主催する『全国大学IT活用教育方法研究発表会』が、アルカディア市ヶ谷で7月4日に開催され、常磐大学国際学部の北根精美准教授が奨励賞を受賞した。

この発表会は全国の国私立大学・短期大学教職員を対象に行われるもので、教育改善のためのIT活用によるFD(ファカルティ・ディベロップメント)活動の振興普及を促進・奨励し、その成果の公表を通じて大学教育の質的向上を図ることを目的としている。2009年度は216名の研究者が参加し、第1次選考を兼ねて54件の発表を実施。その後、9月5日に2次選考が行われ、11月25日の第53回臨時総会で、今回の受賞が発表された。

北根准教授の研究テーマは『webリフレクション・ペーパーによる授業改善と学習管理能力の向上』。この研究は、学生たちが、決められた授業が終了するごとに理解度や感想などをweb上のシステムに書き込み、そこで集められたテキス



今回の受賞者はわずか3件だ。

トをコンピュータシステムで解析するもの。「分かる」「考える」「知る」などのキーワードを活用形も含んで検索することができ、その出現状態などで、学生が授業内容を理解しているか、能動的に取り組んでいるかなどを分析することができる。これにより、教員は学生たちの理解度に応じた授業を展開することが可能になり、学生は授業をもう一度振り返ることで自らの学びを管理することができるようになる。今回も理解度に応じた授業内容や量、進度の調整に有効であり、学



びを振り返る復習ツールとして貢献している点が評価された。北根准教授は「このシステムを多機能化し、教材や文献などを蓄積できるスペースを持つラーニング・ポートフォリオを構築したい」と意欲的に語っていた。

←北根精美准教授/ラーニングポートフォリオは自宅PCや携帯電話からも接続可能にする計画。

国際被害者学研究所 JICA委託事業

自国における被害者施策の発展をめざす

独立行政法人国際協力機構（JICA）の委託を受け、10月19日から開講していた「総合的被害者支援システムの開発」コースが11月27日に終了した。3回目となる2009年度の参加者は、ブラジル、パレスチナ、スリランカ、ウガンダ、ベトナムから、連邦警察、大統領府、社会福祉省、災害対策・人権省などで、被害者施策の中核を担う5名。被害者学の基礎概念から、被害者の心理的回復、連携の取れた支援のあり方など43コマの講義を受講しながら、自国で実際に取り組む被害者支援策（アクション・プラン）の策定に臨んだ。

被害者施策が急速に整ってきた日本においても、その背景には、被害者自身が声を上げ、法律制定に向けて闘ってきた



10月2日に常磐大学情報メディアセンターセンターホールで行われた開講式。

長い道のりがあった、という高橋シズエ氏（地下鉄サリン事件被害者の会）の講義。災害は止められないが被害の程度は人の努力によって削減できる、という中須正氏（防災科学技術研究所）の講義。また、関西研修で触れた、阪神・淡路大震災の甚大な被害と、復興に向けて地道に努力を続けてきた神戸の人々の生の声。研修員の心に響いた学びの1つひとつが「アクション・プラン」に丁寧に練り込まれた。



関西研修で兵庫県こころのケアセンターを訪問。

今後、プランの進捗報告が届く予定であり、教鞭を執った



講師も、期待とともに研修員5名のこれからを継続的に見守る意気込みだ。

←被害者学研究所の学生も参加した講義の一幕。

心理臨床センター公開講演会

心と身体の関係を『臨床動作法』で解説

常磐大学心理臨床センターが主催する公開講演会が10月3日にH棟大講義室で開催され、福祉・介護の関係者や一般の方々など数多くの参加者が集まった。

今回、講師としてお招きしたのは、九州大学大学院人間環境学研究院教授の針塚進氏。日本心理臨床学会・日本臨床動作学会・日本リハビリテーション心理学会・日本心理劇学会理事を務める臨床心理士でもある。講演のテーマは『肢体不自由児・者及び高齢者に対する臨床動作法』。内容は「脳性小児マヒ」や「脳血管障害の後遺症」などによる中枢神経系障害による不自由、また「加齢」により身体が硬くなり思うように



←針塚氏は、茨城大学教育学部を卒業した経歴を持つ、茨城県にゆかりのある先生だ。

動かなくなるなどの不自由といった、さまざまな原因で生じる不自由に対するアプローチの方法だ。講演の特徴は、一般的には「身体の活動」という側面で

考えがちな問題を「心の活動」の大切さという視点からも捉えること。不自由な体を少しでも自分の思い通りに動かせるよう援助する「臨床動作法」の考え方や援助法を分かり易くレクチャーしていただいた。また、パワーポイントだけでは分かりづらい動作法の解説では、会場の参加者をステージに上げ、実際に身体の動きを見ながら動作の基本や動作に及ぼす心理的な影響を実験的に再現した。

「動作」は、個人の「こころ」と「身体」との交流を媒介にする「自己表現活動」である、という針塚氏の講演は、心と身体とのつながりを具体的に実感する絶好の機会となった。





横須賀ゼミナール

現場での体験を活かし『多治見市長賞』受賞

10月17日に岐阜県多治見市で開催された『公共政策フォーラムin多治見』で、コミュニティ振興学部の横須賀徹ゼミが『多治見市長賞』を受賞した。このフォーラムは、地域活性化のための政策を学際的に考える取り組み。開催中には『大学生による政策コンペ』が実施され、『地域の活力(元気)を取り戻すために』をテーマに、



受賞したゼミ生と横須賀徹教授(中央)。

慶應義塾大学や明治大学など16大学20チームがプレゼンテーションを行った。横須賀ゼミが提案したのは『地域丸ごと連携大作戦 一商店街と大学が連携し、地域全体を巻き込んだ活動一』。2009年8月に水戸市南町2丁目商店街と連携して5日間開店した、『MINA2処』という休憩所での体験を基に行った発表だ。このプロジェクトで学生たちは、南町2丁目商店街に企画を持ち込み空きビルの店舗を確保。そして協賛を得るため、数多くの企業にプレゼンテーションを行った。指導に当たった横須賀徹教授は「学生たちは、社会のさまざまな面を見ることができました。こうした現場で積み上げた生きた体験が、今回の受賞に結びついたのでないでしょうか」と語っていた。

インターンシッププレゼン大会

学生たちが就業体験をプレゼンテーション

将来のキャリアに関連した就業体験を得ることで、社会人力の育成が期待されているインターンシップ。常磐大学・常磐短期大学でも科目として扱われ、インターンシップが単位として認められている。それに伴い、2009年度には12名の大学生、15名の短大生がこの就業プログラムを体験。そして、その成果を発表する『常磐大学・常磐短期大学インターンシップ・プレゼン合同大会』が11月24日に開催された。会場には高木勇夫学長やインターンシップに興味がある学生だけではなく、受け入れ企業の担当者も出席。『プレゼンテーション評価票』が配布され、それぞれの発表について『スライドや話の順序』『声や言葉遣いなどの表現』『身振り、態度など』の3つのカテゴリーによる評価が行われた。今回は大学から3名、短大から3名の学生が発表を行い、職場で得た貴重な体験を報告した。発表後には、それぞれの学生を受け入れた企業の担当者が、学生の職場での様子についてコメント。全ての担当者が学生の仕事ぶりを高く評価し、「職場が活性化した」と一様に語っていた。



夜間の開催にも関わらず多くの学生が集まった。

学生表彰制度

2009年度春セメスター学長奨励賞受賞者

常磐大学・常磐短期大学では、学業成績・学術研究活動や課外活動において特に顕著な成果を挙げたり、社会活動において社会的に高い評価を受けた個人または団体に対し、その功績を讃えるため、学長表彰制度を設けている。10月23日の授与式では、



学長奨励賞を受賞した学生たち。

高木勇夫学長より、以下12名の学生が表彰された。

人間科学部現代社会学科3年 宮内 大和

- 第58回水郷潮来あやめまつり弓道大会 一般射込 優勝
- 鹿島神宮主催弓道大会 射込 2位
- 茨城県弓道連盟後援山ざくら弓道大会 競射 準優勝

人間科学部健康栄養学科2年 飯塚由祐、遠藤麻衣、大圖結香、鯉沼有美、篠田沙耶香、手口ゆかり、廣野千穂、茂木麻友美、吉澤麻美、米川明日香

- セブン-イレブン・ジャパンとの「健康づくり応援弁当」開発

コミュニティ振興学部コミュニティ文化学科2年 横須賀 美紀

- 第13回全日本レディースソフトボール大会茨城県予選大会 第1位
- 学科における学習の成果を活かして社会活動への参加

学生支援センター

キャリア支援担当から

●2009年度の就職状況について

2009年度の就職環境は企業の採用数削減や近隣県学生・Uターン学生との競合激化などから大変厳しいものとなった。2008年度であれば内定を得られたと思われる水準の学生が、2009年度は内定を得られないケースが頻発した。こうした就職環境のため全国的に内定を得ていない学生がまだ多数残っており、これらの学生の就職活動状況が再三メディアでも報道されてきた。常磐大学・常磐短期大学においても就職活動を続けている学生が少なくない。

キャリア支援担当では、2009年2月から9月まで学内へ企業を招いての会社説明会開催や求人先の紹介、茨城就職支援センターやハローワークとの連携などで学生の就職機会の拡大を図ってきた。また、窓口・電話での就職相談対応や外部キャリアコンサルタントを招聘して個別就職相談対応、教員の協力を得て緊急セミナーを開催するなどして就職活動中の学生を支援してきた。就職活動を続ける学生については、卒業後も引き続き就職相談に対応、支援していく方針である。

●2010年度の就職について

景気の底が見えてきたところへ急激な円高が襲い、企業業績の本格的な回復時期は不透明となっている。

このような情勢から一般企業の来年度新卒採用計画は、今年度に続いて採用人数を抑制する企業が多いと予想されている。2009年度同様に、多くの企業が早い時期に採用活動を終了してしまう可能性も高い。学生にとっては引き続き厳しい就職環境となる見通しである。

このような就職環境を踏まえ、キャリア支援担当では就職支援スケジュールを前倒しで実施するとともに、例年以上にきめ細やかなプログラムを実施してきた。特に業界・企業研究や履歴書・エントリーシートの書き方、筆記試験対策などについて力を注いできた。

また、学生の就職意識を高めるため、10月に東京で開催された業界研究・会社説明会にバス9台に分乗した約370名の学生を参加させ、毎年2月から開始する学内での会社説明会については、開催時期を早めて2009年12月に1回目を開催した。

間もなく2010年度卒業生は一般企業の就職試験が本格的に開始される。多くの学生が早い時期から就職試験にチャレンジして夏休み前に内定を獲得できるように就職指導に力を注いで行く。



ホームカミングデー開催！

◎常磐短期大学生生活科学科生活科学専攻、幼児教育保育学科の卒業生



ホームカミングデーでは、同日に幼児教育保育学科の学生たちが日頃の学びの成果を発表する「幼教フェスタ'09」が開催され、学生たちの発表を観るよい機会となった。

懇親会では、参加者が思い思いに日頃の悩みや学生時代の思い出を話しながら、卒業生・教員とも再会を喜び、親交を深めた。

10月3日に常磐短期大学生生活科学科生活科学専攻2008年度卒業生を対象としたホームカミングデーを開催した。卒業生10名、教職員5名の計15名が出席した。また、12月23日には、同大学幼児教育保育学科2008年度卒業生を対象としたホームカミングデーを開催し、卒業生34名、教職員10名の計43名の参加があった。

生活科学専攻のホームカミングデーでは、共同炊事として、卒業生と教員がピザとミネストローネ作りに挑戦した。粉だらけになりながらピザの生地を伸ばしては、みんなで色々な食材をトッピングするなど、一緒に楽しく作業をすることができた。

また、幼児教育保育学科の



卒業生センター=便り

恒例の2大イベント開催

● 日頃から培った成果を発表

10月24日情報メディアセンターにおいて『第4回TOKIWA高校生英語スピーチコンテスト』が開催された。今回は、6校14名の高校生が参加。『私の将来の夢』をテーマに熱弁を振るった。今回、第1位となる『常磐大学賞』を受賞したのは茨城県立太田第二高校の溝口愛さん。溝口さんは「他校の方々と交流ができ、大変勉強になりました。また出場したいです」と

→『常磐大学賞』を受賞した県立太田二高2年の溝口愛さん。地球全体を考えられる人になりたいという夢を語った。



笑顔で語っていた。

また『2009ときわ祭』も、24日、25日に開催された。今年のテーマは『百花繚乱～咲き誇る時～』。開学100周年を迎えた記念すべき学園祭を、華やかで、花が咲き乱れるような活気溢れるものにしたいという思いが込められている。今年は新型インフルエンザの流行など不安材料もあったが、所々に消毒液を配置するなど万全な対策を実施。全ての来場者が楽しめる、充実したイベントとなった。



「時代は常磐(トキハトキワ)」～100年の歴史～

● 第37回ときわ祭開催

9月12日、13日に第37回ときわ祭を開催した。2009年は学校法人常磐大学開学100周年という記念すべき年にちなみ、テーマに「時代は常磐」と書いて「トキハトキワ」と読み、「100年の歴史」を副題に掲げて、全校一丸となって取り組んだ。

各クラスでトルネードタワーを製作し、入場の通路に並べてお客様をお迎えした。また、サッカー場により芝生化されたグラウンドにテント村を作り、カレーライス、焼きそば、チョコバナナ、かき氷の販売を行い、飛ぶように売れていた。

体育館では、インターハイ常連の体操部が日頃の練習の成果を多くの方々に披露し、美しく力強い演技に拍手が沸き起こった。



展示の部では、校舎の壁面に巨大なモザイク壁画を飾ったり、映画製作、笠間焼きの研究、お化け屋敷、フェアトレードなどに取り組んだ。

2日目の一般公開日には3,800名を超えるお客様をお迎えし、大成功のうちに幕を閉じることができた。



日頃の学習の成果を発表

● Chigakukan English Festival開催



英語を披露する永井柚帆さん。

12月19日、智学館中等教育学校においてChigakukan English Festivalが開催された。今年度は2学年になったことに伴い、1年次生は有名な洋楽の歌詞を暗唱し、2年次生は自分の関心のあるテーマについてミニ・スピーチを行った。

生徒たちは6つの会場で予選を行い、各会場より25名が決勝戦への進出を果たした。最優秀賞は1年次が2組の永井柚帆さん、2年次が4組の青木未来さんが受賞した。また、最優秀クラス賞には1年次2組および2年次3組が選ばれた。1年次最優秀賞を受賞した永井さんは、「きちんと発表できるかどうか不安でしたが、先生から熱心な指

導をいただいたおかげで受賞することができてよかったです」という感想を話してくれた。また、2年次最優秀賞の青木さんは、「とても緊張しましたが、今までの練習の成果を出すことができ、嬉しかったです」と述べた。当日は100名を超える保護者と大学などからの審査員が参加した大舞台であったが、生徒たちはみな感情を込め、堂々と発表を行うことができ、今後の英語学習に対する大きな一歩となった。



表彰状を受け取る青木未来さん。

みんなで幼稚園をきれいにしよう

● 2009年度マナーアップ運動

県の推奨による、マナーアップ推進事業の一環として、保護者の協力を得ながらの清掃活動が始まって4年目を迎える。

今年の実施日は11月10日。朝、送迎して下さる保護者の方々に、箒などを持参してもらい、子どもたち、職員と共に、

ゴミ拾い、落ち葉掃き、また、用水路に堆積した砂などの除去作業もおこなった。

秋の陽だまりに包まれ、園門前から、園庭、トキワの森、松林に至るまで、紅葉した落ち葉を掃き集め、1時間後には山のように積み上げられた。

例年その落ち葉の一部は、年長児が中心に掘り起こしたさつまいもの焼き芋会に使用される。今回は雨天のため、実施できず残念だったが、普段から、子どもたちの遊びの中で、季節の移り変わ



↑ 掃き集めた落ち葉の山。
← 職員と落ち葉掃きをする園児たち。

りを身近に実感できる自然物として、保育に取り入れ活用している。

やがて集めた落ち葉は時を経て、自然の肥料として、さつまいも畑の土や花壇に混ぜ合わせられ、また、来年度の収穫を豊かなものにしてくれる。

みんなの幼稚園を掃き清める心地良さ、奉仕の気持ち、また、これらの活動が次の活動へ繋がっていくことへの大切な1コマであることを、これからも伝えていきたい。

TOKIWA トキワヴォイス VOICE

常磐大学は、開学当初より心理学の研究を積極的に推し進め、多くの研究者や実務家を輩出してきた。しかし、当初より環境が整備されていたわけではない。そこには、新しいフィールドを切り開くために奮闘された先生方の存在がある。そこで今回の『トキワヴォイス』では、常磐大学での臨床心理士養成について紹介する。

臨床心理士資格に対する取り組み

常磐大学大学院人間科学研究科人間科学専攻臨床心理学領域は、財団法人日本臨床心理士資格認定協会から、2009年4月1日より6年間（2015年3月31日まで）、第1種指定大学院として指定された。これ以前は第2種の指定大学院で、臨床心理士の受験資格を得るには修了後1年以上の心理臨床経験が必要だった。しかし第1種に指定されたことで、修士課程修了後直ちに臨床心理士資格認定試験の受験資格を得られることとなった。そこで今回は、臨床心理士養成の土台作りに尽力された福原真知子先生にその取り組みを語っていただいた。

寄稿



福原 真知子

常磐大学大学院客員教授（カウンセリング心理学／臨床心理学）

先に指定校制度による臨床心理士が誕生しすでに社会でご活躍との記事を拝見し、胸にこみあげるものがありました。振り返れば1993年頃だったかと思います。大学院在校生の有志が当時臨床心理担当教授をしておりました私のところに見え、ぜひ自分たちも臨床心理士の資格が取れるようにして欲しいと申し出られました。臨床心理士制度が始まってまだ日も浅いときです。そもそも当時日本ではカウンセリングやサイコセラピーの分野の専門職について認知度がまだまだ低く、それら分野のアイデンティティの確立、卒業生の職場確保を求めて心理学関係諸学会が動いておりました。臨床心理士認定制度もその流れの中で確立されたものです。

すなわち心理学諸領域の中で、この領域を特に専門とする分野として独立した日本心理臨床学会（1982年設立）が中心となり、約30の関連諸学会がカウンセリング・サイコセラピーの専門家養成について具体的に検討を始めるべく1988年に日本臨床心理士資格認定協会を設置しました。最終的には専門家候補者は認定協会が施行する年1度の資格試験に合格しなければなりません、その受験資格を得るためには当該認定協会が必須とするカリキュラム、それに伴う訓練および、実習プログラムを修得し、さらには臨床心理学関連の修士論文をパスしていることが要求されました。次第にこの制度はこれらプログラムを提供することが可能な大学院を指定していきました。現在では指定校（1種と2種）は約160校に及びます。

在校生から望まれるまでもなく、筆者は日本でのこのような流れには大変関心を持っておりましたし、願わくは後輩となる若い人たちが、常磐大学で育ってくれることを願っておりました。とはいえ、そこにはいくつかの壁がありました。まずは大学院が学際研究「人間科学研究」をモットーに掲げていること、したがって、いわば横の連携研究スタイルがありました。一方、専門職の養成ではまず縦の養成形態を推し進めなければならなかったのです。さらには、この分野での資格は「臨床心理士」のみではありません。しかし諸般の事情を推察し、まずはこの臨床心理士養成のプログラムを設置することは大学にとってもメリットであろうとの確信を得ましたので、関係諸先生にもご協力をお願いし、作業に入りました。ここでは、先述の認定協会が指定するカリキュラムと当時の大学院カリキュラムを照合し、読み替え可能なものは読み替え、不足のものは内容で補うなど、当局が移行措置として許容するあらゆる手段をとりました。課程修了者にはその後受験まで2年半の専門的実地研修（実際にスーパーバイザーのもと、その仕事で収入を得ているという証明つきの勤務）が課せられました。このような条件をクリアして1996年以降2002年までに（私の在籍中に）計7名の方々が、見事ストレートに資格試験に合格されました。この方たちのまさに「道なき道」を切り開いていく奮闘ぶ

りは尊いものであったとしかいいようがなく、私の生涯の忘れ得ぬ記憶としてインプットされております。そして、それぞれあこがれの臨床心理士として教育現場に、福祉・医療現場に勤務され研鑽を積んでおられます。これは、常磐大学大学院が臨床心理士養成の指定大学院に承認される以前の事です。その後、大学では、前記にもありますように1種養成大学院への努力を重ねられ、現在に至っています。しかし、この道はまだまだ険しいのです。この道を究めようとする人々にとって、相互の理解や連携も必須です。この道を求めてあとに続く方々は、常磐大学にはこのような10年選手の先輩も頑張っておられるということ誇りとし、頑張っていたきたいと思います。

臨床心理士への期待

常磐大学は、臨床心理士養成の研究機関として「常磐大学心理臨床センター」を有しており、臨床心理士の養成・訓練のほか、心理相談活動や心理臨床に関する学術研究などを行っている。今後も臨床心理学の領域で積極的な取り組みを行っていく考えだ。

社会環境が複雑化し心の健康に対する社会的関心が高まる中、臨床心理士が活躍するフィールドは大きく広がっている。教育の分野では、地方自治体が設置する教育相談室、大学の心理教育相談室、小・中・高校のスクールカウンセラーなど。私立の相談機関では、私設心理相談室、カウンセリングセンターなど。医療・保健の分野では、病院、保健所、リハビリテーションセンターなど。福祉の分野では、児童相談所、女性相談センター、身体障害者福祉センター、児童福祉施設など。司法・矯正の分野では、家庭裁判所、少年院、刑務所、保護観察所など。労働・産業の分野では、企業内の健康管理室や相談室、公共職業安定所、障害者職業センターなど。このように臨床心理士は、さまざまな分野での活躍が期待されている。

「臨床心理士としての私の歩み」

影山 セツ子

(天使大学看護栄養学部看護学科教授)

1994年度常磐大学大学院人間科学研究科修士課程修了

OB,OG

卒業生の活躍

NOW!

私が臨床心理士の資格取得のことを考え始めたのは、常磐大学大学院の修了を目前にした時期で、そのとき既に看護系短期大学の開設準備室への就職が決まっていました。就職先から短大開設までの2年間の間に研修として何かやりたいことがあるか質問され、思い立ったのが臨床心理士の資格を取ることでした。大学院での臨床心理学関連の取得単位と、かつて上智大学カウンセリング研究所専門カウンセラー養成課程で学んだときの単位とで受験資格が得られると考えたからでした。しかし臨床での研修が求められるため、就職先の上司に週2回の精神科外来研修を希望しました。

1994年4月に和歌山県庁に就職した私は、準備室の仕事の傍ら、週2回市内の精神科クリニックに通い始めました。最初は看護師の経験を生かしてインテーク面接をさせていただき、数ヶ月経過した頃に一人の抑うつ状態の患者さんを担当させていただきました。その後、1回60分の面接で1日3名前後受け持ち、クリニック内の研究会でスーパーバイズを受けたり、県の臨床心理士会の事例検討会で発表したりしながら研鑽を積みました。2年後、常磐大学大学院の修了並びに単位証明書、上智大学カウンセリング研究所の単位証明書、クリニックの研修証明書を添えて受験申請し、認められました。そして、初回受験で合格し、1996年4月に臨床心理士として資格認定協会に登録(No.06261)しました。

現在は、本務の天使大学では精神看護学を担当し、週1回札幌市内の大学相談室の相談員を務めています。また、札幌司法書士会ADR手続実施者養成講座の「リーガルカウンセリングの前提となる心理学的理論と技法」、および考査の実施を担当させていただいており、臨床心理士としての活動の場も与えられています。今、歩んできた歳月を思い起こしながら、資格取得のきっかけが常磐大学大学院での学びであったことを考えると、感慨深いものがあります。



Not Today

諸澤 篤子 [学校法人常盤大学 常任理事 (一貫教育担当)]

数年前、ボストンのシンフォニーホールで行われたコンサートを聴きに行ったときのことである。日本ではあまり出会うことのないウィットに富んだ観客同士の会話を耳にした。

それは平日の午後、明るい秋の日のマチネで、青空に映える紅葉が美しく、心躍らせてホールに向かったものだが、入口を入ると、観客のほとんどが高齢者、正直少しいメージが違ってしまったような気がしながら、それはともかく、買っておいた舞台脇の5階バルコニー席へ向かった。そこもやはり座っているのは、かなりのお年を召した人たちがばかりだったので、私の席が誰かに立ち上がってもらわなくても座れる通路側だとわかったときは、ホッとした。というのも、見るからに体重の重そうな外国人の高齢者にとって、日常の所作はとて大変で、皆、ひとたび座ったらできることなら立ち上がりたくないし、実際に立ち上がるとなると、動作の始めから終わりまでとても時間がかかるのだ。

私は前から2列目の席に座っていたが、その時、1列目の席のチケットを持ったやはり高齢の観客が来て、通らせてもらいたい旨をすでに座っている観客に頼んだ。席は真ん中で、そこに行くためには数名の客に立ってもらわなければならない。すると、座っていた観客の一人が、「ここを歩いて行かれたらどうですか」と座席の前にある手すりの上部を指さした。バルコニー席の前には落下防止用の腰高の木製の柵があり、その上は約10センチ幅の手すりになっている。古いホールの5階席はかなり高く、舞台は十数メートル下にある。その手すりの上をアクロバットのように渡って行きなさい、と言うのだから、私は驚いた。すると、言われた方はさらりと「Not today」と答えた。

もちろん初めの発言はジョークである。それに対して「今日は(ちょっと)やめておきましょう」とはなんと洒落な返答だろう。それを受けて、老人たちは大儀そうではあったが立ち上がって場所を空け、その場にはなごやかな雰囲気になった。後日、この話をアメリカ人の知人にしたところ、こういう応答をタイミングよく行うために、自分たちは日頃から心がけて、ユーモアのセンスを磨き鍛えている、と言った。

ところで、このジョークは「今日は(例えば)足が痛くて無理だけれど明日だったらできるかも」と「若い頃ならできたかもしれないが、今はもうできない」という2通りに解釈できるようだ。後の方の解釈は、話し手が高齢者であればなおさら、話し手の過ぎし日の一コマを垣間見るようで微笑ましい。



常盤大学大学院
常盤大学
常盤短期大学
常盤大学高等学校
常盤大学幼稚園
智学館中等教育学校

—表紙写真解説—

Tokiwa Memories
*7

常盤大学の開学に伴いF棟(図書館)・G棟・H棟が完成した。G棟・H棟は、現在も授業や講演会などで使用されている。F棟は、1995年に完成したQ棟総合情報センター(現・情報メディアセンター)に図書館の機能が移り、現在は、国際被害者学研究所などが設置されている。

寄付者ご芳名

ご厚情に深く感謝し、以下のとおりご報告いたします。

◆一般寄付 *敬称略 [期間 2009年8月~12月]

寄付者	金額	寄付者	金額
諸澤 篤子	50,000円	江原 昌義	150,000円
竹中 治利	50,000円	河野 公紀	25,000円
宮田 雅史	150,000円		

開学100周年記念事業募金開始後の寄付者につきましては、改めてご報告いたします。

寄付金のお願い

2009年11月より諸澤幸雄奨学金の創設と充実を目的とした、開学100周年記念事業募金が始まりました。皆様におかれましては趣旨をご理解の上、ご協力賜りますようお願い申し上げます。

◆寄付金の申込みおよび問合せ先

学校法人常盤大学 寄付資産運用課

TEL : 029-232-2759 E-mail : kifu@tokiwa.ac.jp

寄付募集の詳細については、ホームページをご覧ください。

URL <http://www.tokiwa.ac.jp/>

※寄付金の申込みは任意ではございますが、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

編集後記

学校法人常盤大学開学100周年記念事業が、次々と実施されました。ご協力いただいた関係者の皆様に、心よりお礼申し上げます。これからも皆様のご期待に沿えるよう、教職員一同、より一層の努力をもって理想の教育を追求して参りますので、今後ともご支援のほどよろしくお願い致します。